

林明子著

『生活保護世帯の子どものライフストーリー — 貧困の世代的再生産 —』

(勁草書房、2016 年)

山 田 浩 之

最近は聞かれなくなったが、かつては弟や妹を高校や大学に進学させるために自分が働くという話が美談として語られていた。映画や小説、テレビドラマでも、こうした家族のために生きてきた青年の物語が繰り返し語られていたように思う。

また、現在は少なくなった夜間の高校や大学には、定職を持ちながら通っている者が少なくなかった。昼間は仕事をし、夜、学校に通うという 2 重生活を送る者は苦学生と呼ばれた。

1960 年代の日本では、貧困は大きな社会問題の一つであった。私の子ども時代にもトタン板で出来たバラックや川の上に建てられた掘っ立て小屋など、見るからに貧しい家に住んでいる子どもたちは少なくなかった。当時、こうした貧困から抜け出る主要な手段の一つが教育であった。学校で良い成績をとり、高校、大学へと進学すること。それが達成できれば貧困から逃れられるはずであった。実際に高度経済成長に後押しされ、見た目の貧困から脱した者たちは少なくなかったのだろう。

ところが、次第に夜間の高校や大学に通う定職を持った学生生徒は少なくなっていくた。かつての目的とは異なる目的で進学する者が多くなってくると、こうした夜間の学校は次第に規模を縮小することになった。また、家族のために働くという美談も昔話になっていった。こうして日本には貧困や社会的な格差の問題があたかも存在しないかのように語られなくなった。それは、貧困が

見えなくなっただけではなく、教育の力に期待がされなくなったからかもしれない。

近年になって、再び社会の格差と子どもの貧困が大きな社会問題として取り上げられるようになった。しかし、かつての貧困の問題についてはほとんど触れられず、新たな社会問題として語られているように思える。もちろん社会的な背景は大きく異なっており、60年代と同じ文脈で論じることはできないのだろう。

ところが、林明子氏の著作を読めば、現在の貧困問題にも「家族」が大きな影響を与えていることがわかる。現在も美談として語られるであろう家族との関係が、実は貧困世帯の子どもたちの学力に大きな影響を与えている。かつてと同様に家族を重視することで学校や進学から撤退する者がおり、それが現在の貧困の大きな問題の一つであることに気づかされる。子どもの貧困は決して新しい社会問題ではなく、また、これまで貧困の再生産にいたるプロセスの検討がいかにないがしろにされていたかにも改めて気づかされる。林氏は問題提起ばかりで、等閑視されてきた再生産のプロセスを子どもたちのライフストーリーを分析することでみごとに解明している。

本書は次のような構成になっている。

序章 問題の背景

第1章 先行研究の検討

第2章 研究目的と分析の視点、研究方法

第3章 生活保護世帯の子どもの中卒後の移行経験

— ケースファイルを用いて

第4章 生活保護世帯の中学生の家庭生活と学校生活

— 質問紙調査による比較検討

第5章 生活保護世帯の子どもの中卒時における進路選択

— ライフストーリーに着目して

第6章 生活保護世帯の子どもの中卒後の生活とその後の進路

— ライフストーリーに着目して

終章 貧困の世代的再生産プロセス再考——総合考察

序章での問題提起の後、第 1 章では貧困問題、若者の移行、社会的再生産などの先行研究の検討がなされている。それをふまえ、第 2 章では研究の目的、手続き、方法が示されている。本書の目的は大きく次の 2 つである。一つは貧困世帯の子どもの移行の実態を明らかにすることである。中学校卒業後の高校、さらにその後の進学、あるいは中退の実態は、これまで十分に検討されてこなかった。もう一つは、貧困世帯の子どもの進路にいたるプロセスを解明することである。

このような関心のもと、第 3 章と第 4 章では量的な分析が、第 5 章と第 6 章では質的な分析が行われている。第 3 章では各世帯のケースファイルにもとづき、移行パターンが検討される。また、第 4 章では質問紙調査により貧困家庭と一般家庭の比較を行い、進路分化の要因が検討される。

このような量的な調査に続き、移行の「プロセス」を解明するため、インタビューにもとづいたライフストーリーの検討がなされている。第 5 章では中学校卒業時が、第 6 章ではそれ以後の移行が対象とされている。

こうして量的な調査と質的な調査の両面によって貧困世帯の子どもたちの実態と、進路選択のプロセスが明らかにされていく。こうした本書の分析はポール・ウィリスの問い「なぜ労働者階級の子どもたちは大学に進学しないのか」を日本の文脈で調査、検討したものだと言える。現在はウィリスの時代とは社会的な状況が大きく変化し、産業構造の転換により移行対象であった「大人」が失われてしまっているとされる。また、日本ではウィリスが対象としたイギリスのような西洋的な階級文化が存在しているわけではない。ようするに、ウィリスの枠組みが、時代と社会の変化によって無効になってしまっている。

しかし、貧困世帯の子どもたちが非進学を選択するメカニズムは確かに存在している。本書は、別の視点から日本の社会的文脈において、そうしたメカニズムを明らかにしている。その一つが家庭と学校の対比である。貧困世帯の子どもは、家庭での役割を重視し、家庭で自身の存在意義を見いだそうとする。こうして家庭を大切にすれば、学校での活動からは身をひくことになる。学校での勉強や交友関係は重視されず、それが学力の低下や中退というキャリアを引き起こす。冒頭で述べた家族主義が貧困世帯の子どもを学校から撤退させて

いるのである。本書はその過程をライフストーリーにより緻密に描き出している。

なお、タイトルには「ライフストーリー」とあるが、本書の分析手法は筆者も述べているように、いわゆるミックスドメソッド（「混合研究法」）である。つまり、質問紙などの量的な調査と個人へのインタビューによる質的な調査をあわせて分析が行われている。また、ライフストーリーとされている第5章、第6章もインタビューの結果が集的に分析されており、一般的には「ライフストーリー」よりも「ライフヒストリー」と呼ばれる方法が採用されている。厳密に区別すべきとする考え方もあるようだが、欧米でのライフヒストリー研究の呼称はさらに多様である。このことは本研究の意義をいささかも損なうものではない。

本書の知見は重要であるが、気になることがないわけではない。本書の問題というよりは、近年の（あるいは従来の）教育社会学研究に通じる問題があるように感じてしまう。それは学校での成功、あるいは高校、大学への進学が「望ましい」こととして語られることである。

もちろん、進学を望む貧困世帯の子どもたちにとっては、学校での成功は非常に重要であろう。進学を望む貧困世帯の子どもたちが進学を選択できるよう、そうした機会を保障することは重要な課題である。この点では本書の提言は非常に有効である。

しかし、果たしてそれだけが「望ましい」進路なのだろうか。貧困世帯の子どもたちは、進学を望ましいと考えているのだろうか。

ウィリスの描いた労働者階級の子どもたちと同様に、日本の子どもたちの中にも進学を家族や地域からの離脱と捉える者は少なくないのではないかと。あるいは、望んで大学に進学しても、それがさらなる困難を招くケースもあるのではないかと。しばらく前に学歴社会は終わったと言われたが、実際には現在は研究者も子どもも、あるいは社会全体が過剰に学歴主義を内面化しているのではないかと。学歴によらない、オルタナティブな進路があるような気がしてならない。こうした学歴とは異なる移行を明らかにする可能性があるのは、本書で採用されたような質的分析法であろう。著者の今後の研究に期待したい。